

## 書 評

### 『近代測量史への旅 ゲーテ時代の自然景観図から明治日本の三角測量まで』

石原あえか著

(法政大学出版局、2015年、本文258頁 人物索引・文献リスト・注75頁)

平野 篤司

本書は、日本人ドイツ文学者による近代ヨーロッパにおける測量学の興隆とその後の展開の歴史、および日本におけるその分野の端緒と展開をそのヨーロッパとの相互的影響関係を含めて跡付けた詳細な実証的探究の驚嘆すべき成果であると断言してもよいだろう。

驚嘆すべきというのは、実証の綿密さとパースペクティブの広さ、そしてそれらを支える持続力であり、精神的体力であり、雄弁な叙述のことである。これによって、当方にもこのような学問の歴史があったのかという驚きとともにこのような研究があったのだという新鮮な認識がもたらされたのだ。

もとより測量学とは縁もゆかりもない評者がその研究のありようを見定め、その評価をするなどということはおこがましいが、敢えて素人の一読者としてこの著作から受けた感銘を綴るのも本書にとって荣誉となるかもしれぬと考え、こちら本書を改めて未踏破の大地として思い切って足を踏み出そうと思う。

もっとも、こちらには本書との接点がるでないというわけではない。当方もドイツ文学の学徒の一人であり、著者の研究の本丸であるゲーテの手掛けた自然科学の分野には、すべてとはいえないが、惹かれるテーマはいくつもある。そもそもこちらにとってのゲーテは、その自然観、あるいは彼に内在し、また彼を取り巻く自然力を抜きにしては考えられぬものである。ベンヤミンによって指摘された『親和力』における、自然の暴力というべきだろうか、自然力の潜在あるいは現在などゲーテの世界の基底にあるのだと思われる。本書の第2章において、『親和力』に即して、その登場人物の一人で測量学に通じた大尉の仕事と世界観が実証的背景的な面から緻密に論じられていく。その際著者の方法論には際立った特徴がみられる。それは、厳格な実証精神に貫かれていることである。そこには恣意的な文学的解釈は毫も見受けられない。こちらなど、思わず喝采を送りたいほどだ。ただし、当方はベンヤミンとともにそのようなおり、同時にその厳しい実証的な現実のかなたに何かアモルフな力、ゲーテであればデモーニッシュのものとも呼んだような自然力を構想してしまうのである。そこからは近代科学の方法が切り開く新しい世界像の隘路というか、陥穽が見えるのである。著者はひょっとして、そのような見方を勇み足というかもしれないが、敢えていえば、厳密な精神と、かえってそのもとから生じてくる想像あるいは幻想の世界の双方が相まって豊かな世界を垣間見せるのだと当方は言いたいのである。評者はここでさらにムーヅルの世界を思い浮かべてみたりする。もちろん、ものという対象を厳密に見極めることは、大前提である。さもないければ、自然科学はおろか、文学もありえないというの

がこちらの信念である。この点で、評者は著者の研究姿勢に強い共感を覚える。

さて、本書において詳述される近代における「地球を測る」という測量学は、16世紀に始まる三角測量を起点としているが、数学と物理学の進展と歩みを共にしているという。子午線の測定のためにメートル原器が抽出されたように、地球を測るという動機によって実に様々な諸分野が相互に刺激を与え、刺激を受けながら連携的に進展していく様子が、本書の第1章では活写されていく。たとえば18世紀にフランス王立科学アカデミーによって派遣されたペルーとラップランドへの探検隊の活動と成果は、地球の凹凸による高低の観点を含みながら、同時により強く水平方向へのヨーロッパ世界の拡大の志向性を表しているように思われる。その後のヨーロッパ列強による世界探検の試みは、動物学、植物学、鉱物学などを包括する博物学の時代の到来を告げるものでもあるが、その基盤的な作業を担ったのが測量学である。それは精密な地図の作成へとつながっていくからである。その意味で測量学は、近代ヨーロッパの進展と命運を左右する不可欠の方法でもあったのだ。著者は、大地を測量するように、膨大な文献を支えとしてこの学問の世界を渉猟する。そのための用具は、英独仏という近代ヨーロッパの言語であり、自然科学的知見であり、世界各地に展覧されている、あるいは埋もれている器械であったり、実に多様な地図や絵画であったりする。しかも、著者はそれらを大半は現物をそれも現地で見聞しているのである。これは文献学というよりも、フィールドワークというべきであろう。本書で開陳される資料や文物、出来事やエピソードなどは、文字どおり著者の足で実地に探索したものばかりといっても過言ではない。著者が足を運んだ資料館は本書7頁に記されているが、ヴァイマルのアンナ・アマリア公妃図書館をはじめとして枚挙にいとまないほどである。評者は、著者自身を知の測量士と呼びたいと思う。測量士は歩かなくてはならない。旅を宿命としているのである。この本の題が『近代測量史への旅』であることも故なしとしない。この測量士によってとびぬけて高い解像度をもって測られ、18世紀から現代にいたるまでの時の遠近法も加味されて観察された科学的、文化的大地は、最終的に実に豊かな地図として姿を表す。本書に付されている文献目録および絵図を含む視覚的資料を一瞥するだけでも、著者の仕事のパースペクティブの広さには驚嘆を禁じ得ないであろう。これは単なる学術書の文献一覧や資料ではない。これは、事象を確実に、また生きたものとして豊かに動的にとらえるための必須の指標だからだ。

第3章では、ゲーテを中心としたヴァイマル文化の中での地図の図像としてのありようが追求されている。その中で風景の図像をめぐる大きな役割を果たすのが博物学者アレクサンダー・フンボルトであり、ゲーテその人である。フンボルトのものは、学問的厳密さを旨とし、情報を客観的に与えようとした固い無機的な図像であるのに対し、ゲーテの手によるものは総合的、有機的、宇宙論的であり、象徴的な芸術的絵画に近いものだという著者の指摘がある。この相違は、単なる趣味の違いを超えた、芸術絵画と自然科学的図像の双方に認識上の大きな問題を喚起しているはずである。ゲーテは、あいまいな文学趣味や芸術趣味を退けるほどに、ものに即した認識を敢行した科学者であり、芸術家であったが、世界の豊かさを表すものとしての芸術家の立場を離れることはなかったように思われ、さらにはそれが彼の科学者としての立場を危うくしたとも考えられるのだが、しかし、ひるがえって近代科学の隘路ということを考えてみれば、決して捨て去ることのできない問題を提起しているともいうことができるだろう。深く考えさせられる観点である。

さらにヴァイマルの絵画学校が、自然科学上の図像学と芸術絵画を未分離のままに包括的に取り扱っていたという指摘があるが、これなどゲーテの文化圏すなわち古典的ヴァイマル文化そのものを物語るのではないか。雲や大気を中心とした気象観察、火山学、さらには天文学などもゲーテを惹きつけてやまなかったが、そこにはたとえば、イエーナ大学附属天文台が大きな役割を果たしたことが明らかにされている。これらのことから、ゲーテを中心とするヴァイマル文化が、事象の自然科学的把握を基礎としながら、全体的、包括的な世界の理解を志向していたということの表れなのだと思う。単なる交流の場ということを超えて、領域統合的、人的連携的な結節点として、ヴァイマルという豊饒なトポスがあったことに改めて気づかされたのだった。

さて、ときあたかも評者が本書を手取る直前に読了したのが、現代スイスの作家アドルフ・ムシュクの新小説『レーヴェンシュテルン』<sup>1</sup>であった。これは、日本がらみの物語であり、その付録には、2011年の東日本大震災および福島原発事故の惨状についての記述もあって、作家の執筆動機がこまやかに語られている。この小説は作者の日本に寄せるオマージュにもなっている。この小説の主人公のレーヴェンシュテルンは、江戸時代末期、日本を窺いその開国を迫る帝政ロシアの極東探査隊の乗組員としてバルトの地からはるばる大航海の末日本列島に到達し、数年間長崎に留め置かれたまま、ロシア帝国の委託任務を果たすことはかなわなかったが、それなりの充実した日本の見聞を集めている。この小説は、その波乱万丈の顛末をスペクタクルといってもよいほどダイナミックに、かつ重層的に描いた物語だ。この物語と本書第4章の記述を読み合わせてみると、18世紀中葉における激動する国際情勢と新しい発見に満ちた地理学上の知見に関する相互的、立体的な構図が得られるだけでなく、様々な次元がある時は重層化され、またある時は交差して、まるで一篇の壮大な映画か活劇を見たような気に襲われるのは当方ばかりではあるまい。

ところで、彼の上官にクルーゼンシュタインという提督がいるのだが、このドイツ人が本書第4章では大きな役割を演じている。クルーゼンシュテルンは、ヴァイマル文化圏を出自とする地理学者であり、帰国後彼の手による日本地図をヴァイマル公カール・アウグストに献呈しており、それがアンナ・アマリア公妃図書館に所蔵されているという。また、シーボルトは極秘裏に入手した伊能忠敬の原図をもとにした日本地図を彼に捧げている。このように見ていくと、ヴァイマル文化は、時に応じて中心的な人物を浮上させそこに様々な事象の結節点を生み出してきたという思いが強くなる。日本というトポスがそこに結ばれたということは確かであろう。これはおそらく通時的かつ共時的な収斂点であろう。この点に関する本章の論証は、まことに的確かつ説得的である。ここに至って、知の三角測量の成果が姿を表した感がある。それは何よりも本書の構成が如実に物語っている。知の測量士は、奥行き深い広大な領野をヨーロッパの近代と日

<sup>1</sup> アドルフ・ムシュク (Adolf Muschg) 1934年、スイスはチューリヒ生まれの作家。ドイツ芸術院院長を務め、ドイツのゲオルク・ビュウヒナー賞をはじめとして数々の榮譽ある賞を受けるなど華々しい経歴と業績を持つ現代ドイツ語圏文学の大家。彼のエッセイ集にも開陳されているが、その関心の的は、同郷のケラー、ドイツ古典詩人のゲーテ、そして日本なのである。今般の小説作品は次のものである。Adolf Muschg: Löwenstern, München (Verlag C.H.Beck oHG) 2012

本の明治時代までという時間的な限定性はあるものの確実に踏破した。この作業の結果は、近代における世界規模での人の営みと文化のありようを、通時的かつ共時的に照らし出すこととなった。

最終章では、明治期の近代日本の三角測量史がとくにドイツからの影響という観点から文学作品や映画を含めた様々な資料から綿密に跡付けてられている。ここでは物語の種がいたるところにちりばめられていて、眩いばかりである。この章においても基本的に著者の姿勢は変わらない。緻密な文献学的手法と広いパースペクティブは揺るがない。しかし、ここで評者にとって最も印象的だったのは、その文献学的なものあるいは実証的なものというよりも、叙述すなわち語りの流麗さである。当方には時としてまるで講談話でも聞いているような気がしたものだ。知の愉楽とはここまで展開するのかと驚くほどであった。本書とともに実に楽しいひと時を送ることができた。この語りの部分に著者の文学精神の流露を見てもよいのかもしれないと思った次第である。本書が全体として、また細分において大変な労作、力作であることに違いはない。

さて、最後に測量という主題に関して、ドイツ文学に連なる者として、本書では触れられていないが、プラハ生まれの作家カフカの名前を挙げておきたい。カフカといえば、彼を一応はドイツ文学のくくりで取り扱うのが通例だろうが、歴史的にはオーストリア人であり、チェコ人でもあった。かてて加えて、彼にはユダヤ人という要素がある。作家としてのカフカの故郷とよりどころはそのような区別を越えてドイツ語という言語ではなかったかと思われる。19世紀末から20世紀初めにかけての中部ヨーロッパの迷路で彼は、新たな精神の地図作りを試みたとはいえないだろうか。カフカのいた当時のプラハは、まるで三角測量の基準点であるかのようだ。カフカは、自分を定点として20世紀という新時代の世界を測量することによって、そこに確かな展望を切り開いたといえるだろう。彼の未完の長編小説『城』の主人公の職業が測量士であることは、偶然などではなく、実に意味深いことだと思われる。著者は本書において近代測量史の世界を丹念に精密に測量したのである。カフカは、20世紀の世界を測量したといってもいいだろうが、それはやはり未完成に終わらざるを得ないほど丹念に精密に、そして誠実になされている。このように見えてくると、測量という作業は、物理的にも、また精神的、比喩的にも極めて有効な方法あるいはメタファーになりうるということが見えてくるのである。著者は、本書を次の言葉で書き始めている。

人は一体どこから来て、どこに行くのか―。それは生を享けた人間にとって、一生の、そして永遠の問いである。と同時に各人に与えられた人生の舞台となる地球や宇宙がどんなものなのか、そしてたとえどんなにちっぽけな存在で、ほんのつかの間の出番にすぎなくても、その壮大な舞台のどこに立っているのか、確認したくなるのは当然だろう。

この一節など、そのままカフカ、あるいはひょっとしてゲーテのテキストの一部としても読むことが可能なほど、大きなスケール感と余裕があつてしかも含蓄が深い。ここから測量の世界へは一つの確かな道が通じている。このことに毫も疑いはない。